

香 蘭



香 蘭

2018年(平成30年)12月号
第95巻 第12号 通巻1056号

目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(40)	近藤光子	表二
今月の特選	石井・伊藤(康)・城・坪・坪倉・	
近詠十五首 危険な夏	大井田・西野・水本・本田	川原優子
作品	川原優子	6
一		20
二		29
三		37
推薦香蘭集		37
香蘭集		37
村野次郎への旅(105)		38
歌の生まれる場所(72)	千々和久幸	18
エッセイ・自由研究 木俣修 香蘭の歌と歌集	高田みち恵	28
焦点 点(十月号) 何でもあり	小原裕光	43
七首抄(十月号)	鈴木順子	46
近詠十五首「裡なる石」評(十月号)	西野美智代	49
作品一特選欄評(十月号)	桜井京子	50
作品一 評(十月号)	相川公恵	52
作品二	柏原公恵	54
作品三	和田羊子	56
香蘭集	石井雅子	58
緑地帯	平川・矢口(紀)・吉澤	60
明宝研究会第九十九回九月例会	杜澤光一郎	62
歌集管見 志野暁子歌集「つきみつる」評	大井田啓子	72
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動き		74
他誌拝見 96	黒羽絃子	76
歌会及び会合・会員消息・他		77
編集後記・新宿日記		82
平成三十一年新年歌会のご案内		82
表紙絵	香蘭短歌会のマーク「蘭の花」	和雄
目次カット		和雄



2018年(平成30年)12月号

第95巻

第12号

通巻1056号

年老いて身にほしきものあらねども

ただ一つほしわれの佳き歌

近藤光子

飯塚書店の『短歌用語辞典』を何気なく頁を繰っていると名だたる先人、現在ご活躍されて居ります諸先生方の中にありまして、わが村野次郎先生の作品が二十八首も点在して、とても嬉しく親しみを覚えたのを思い起こして

「角筈」

この用語辞典は作品の中に使われます。「ことば」の用例をあらゆる歌人のなかから選ばれ、具体例として載っております。村野先生のこのお歌は辞典の三九〇頁に在りまして石川啄木の隣に位置しています。元々先生の歌集『角筈』に掲載されているのですが、老境の心情が切実に伝わるこの作品をと決めたのも生重意のようですが、先生の心情に近いものが重なりつつある所以かも知れません。三十代にて香蘭に迷い込んだ私も、先生のこの作品に近づきたく思うこと頼りです。この辞典には村野先生の愛弟子である星野丑三先生の一首も(二六七頁)に掲載されています。

〔角筈〕226頁、『村野次郎三百首』119頁に所収)

四選者の作品

幻影 平塚 千々和 久幸

暇つぶしに生きているからこの先を誰かがゴドーになりたくなくてあの角を曲がれば何かありそうな気ので今日まで曲がらずに来て『平成の歌姫』か、ほう沖繩かい 安室奈美恵は知らずに生きてさつぱりと別れゆきしを口惜しとも羨しとも思い振り返り見つ振り返り手を上げ雑踏に消えゆきし幻影をながく記憶に留む 実らざる恋もあるべし信号を寡黙に人の群れて渡れる

断腸花 我孫子 丸山 三枝子

紅谷町の駐車場まで来たるとき時雨はげしく後ろより来つ午後四時にひとりワインの栓を開け飲み終る頃妻帰りきつ油照りの午後の踏切こえゆきしアオスジアゲハ曇天に消ゆいくつもの落蟬を見て秋に入りペランダに今日しろがねの雨汀まできてひきかえず蓮池のここより先はわれのハザード夕ぐれの公園にきて銀河系地球の隅にぶらんこを漕ぐ 関東に秋雨前線近づける朝を出できつ校正のため 断腸花と呼びて触れゆく古里の母の庭にも咲いてるだろう

平成の尽きんとしつ列島のいたるところに集中豪雨

延長戦 東京 桜井京子

はほづゑに鬱々ものを思ふなり思つてももうせんなきことを過剰なるものとは組まず炎天の街を歩けばくらくとせり 国旗立てバスが来るなり当分は来ないのだらう私のバスは追いつかれ延長戦のやうな日々ひやくじつこうが咲き三月過ぐ完全充電まであと僅かこんなとき不意にひらめく悪事ならめやらりらりら御飯が炊けたといづこにか鳴つてゐるなり朝が来たからひだりてに教会の庭見つつ過ぎ水曜歌会にけふは行くなり あやしてもあやしてもぐづつてゐる花夏ひぐれの庭にもう鯛が

次は根府川 横浜 渡辺 礼比子

詩集より顔を上げればいつしかに人まばらなり 次は根府川 四肢伸べて富士湧水を泳ぎゆくあめんぼに会う旅のはじめを なつかしき訛り聞きつつ揺られゆく駿豆線三島二日町まで 五つ六つ願いごとせりバス待ちの暇に訪う三嶋大社に 稔り田の風通い来る小座敷にうたた寝したり旅のいとまを 虫すだく江古田の森を抜けてゆくころ寒く日は母に会うべく 帰れといひ帰るなという老い母よゆうべホームを去なんとすれば フェンスより突き出す薔薇の木抜かんとう夫を今夏も言い伏せにけり

今月の特選



君 不 去 習志野 石井雅子

「さみざらず」日本武尊が海にきて弟橘媛を詠みし木更津
 入水せし媛の衣が流れ着き「富流津」が富津になりしとぞきく
 与三郎お富のゐたる木更津の「海ほたる」にきて海に吸はるる
 寶巻きにされ与三郎の投げ込まれし木更津の海は高く波立つ
 『与話情浮名横櫓』『源氏店』玉三郎のお富の色香
 ひんやりと炭酸泉に浸りつつ血管だけが若返つてもねえ
 スマホ壊れ冷蔵庫こはれ台風きて おばさんはうまく泣けないのだ
 キバナコスモス 東京 伊藤康子
 菜の花やポピーやコスモス育める花咲かじいさん花咲かばあさん
 道沿いにキバナコスモス群れ咲けり夕刻に水をやりいる人よ
 どの店も防災グッズ品切れす 仏具屋で買う運型ロウソク

いずこより香り来るや金木犀誘われすつと角を曲がりぬ
 スマホアビニューの友より葉書の届きたり あなたへのメール届かないから
 朝一よりクレーム電話につかまりぬ 「申し訳ありません」の一日
 転勤と聞けば単身赴任でしょパートのおばさん話をもつてく
 たんとおあがり 豊中 城 富貴美
 欲しくとも産めざる人もをりまする「生産性ない」切にご容赦
 秋桜の色とりどりが輪唱のやうにそよげり「コスモスの丘」
 濃紫、鶯色ピオーネが庭になると瀬戸の甘さを送りくださる
 半年をみづさへのめぬ弟が秋の彼岸の母の忌に逝く
 祭壇の弟に神酒を注ぎつつ「好きだった酒たんとおあがり」
 息詰まるほどのくれなる彼岸花の傍よぎりゆく弟の柩
 ちちははに妹、弟、夫も逝き無月の夜を尾花がまねく
 たちちねの母 東京 坪 裕

遊び惚けて帰れば母に聞かれたり棚田の田圃の水見てきたかと
 田の苗は今が一番大事なり一滴の水も欠かしてならず
 次々に棚田の田圃見てまわる水をたたえて月が泛べり
 がつついて食べ終るまで母さんが黙ってそばに付いてくれた
 うぐいすの谷渡りの声幼くてたちねの母召されてゆきぬ
 四人の児を育て上げたる母にして我だけついに子を持たざりき
 透明に五月の風の過ぎるとき一年たつて母を詠みたり

十万余軒 ふじみ野 坪倉 寛

温暖化の異常気象とをのけば迷はず冷房に頼れと言ふこゑ
 二十年使ひ続けたエアコンが熱中症にて頓死をしたり
 市民権しかと得たりし彼岸花わがもの顔に占むる一角
 心臓は癌にはならぬ道理にて死因が心臓癌なるを聞かざり
 おお何と十万余軒の血管がわが体内をめぐりみるとぞ
 牧水が湯治したるを躰ふ湯に浸りてをりぬ一夜なれども
 高山の街路樹に交じるやまほふし熱し足らぬを横目に歩く

改元近し 川崎 大井田 啓子

上半身を強化しませう大雨の今日のトレーナー生き生きとして
 戦争が昭和を元気にさせたるや平成の蝶ひらひらと過ぐ
 溜め池をお濠と言へばなにがなし心ゆるびぬ 春の日差しに
 一日に三度の食事忘れずに昭和平成かけ抜けて 春

キャスターが公務員に言ふだらう「天皇としての最後の出席」

ベットにも長寿体操させる時やがて来るべし平成終はる

平成の終はるも憲法改正も関はりのなしストレッツチする

初秋の風 東京 西野 美智代

政権の微り手抜かり台風の眼に見透かされ被害かさなる
 七歳の前歯の欠けし隙間より初秋の風が吸ひ込まれゆく
 特産の和紙に風船爆弾を造りし里に友は老いゆく

一円玉を動かすほどのエンジンではやぶさ2号はリュウグウに着く
 手放して得たる気楽さ始めから必要なかなかつた荷物
 慎重に言葉えらびて突つ込めるマツコ・アラックスは繊細である
 十五夜の昨夜は姿を垣間見せ満月の今宵土砂降りになる
 水飲むトシボ 倉敷 水本 美恵子
 炎帝が大地を燃やす真昼間をよしずの陰にて水のむトシボ
 ひと日にて秋めく庭に気が付けば彼岸花の花芽出揃ふ
 吹く風の秋めく九月タクシーにて歯科医院へせつせと通ふ
 とりあへず抗生物質を服用しその場はしのご「親知らず」めつ
 「親知らず」抜くまでひと月レントゲン、CT検査、麻酔の話
 赤々と酷暑を咲きし玄関の日日草に疲れて九月
 長雨の昼を鳴きつぐこほろぎよまた持つてゐる要らぬ奥歯を
 この夏の 長崎 本田 民子
 この夏の蟬声ほんの五度ばかりわが耳の蟬しじゅう鳴きおり
 来年まで取っておこうと夫が言うお盆に残りし火花と爆竹
 枝も葉もススキリ降ろされ街路樹はすこし寒いと言つてるような
 ワイパーのふつきれそうなゲリラ雨に命がけなり秋は気まぐれ
 台風は息子の家の瓦吹き飛ばし酷暑をすこし和らげて去る
 隣組の会長さんがわが傘寿の祝い持ち来るトントントンカラリ
 紫のしじみ嫌ふたつ今日もまた鶏頭の花につきつきりなり

川原 優子

危険な夏

吊革のかすかに揺れる昼下がりに眠りに落ちる寸前である
 パラソルの影にしつかり隠れてもこの暑さから逃れられない
 南国の海の青なり走りゆくBMWに恋をする夏
 つるつるの幹を晒して百日紅乱れ咲くなり危険な夏に
 月曜の飛び込み事故に躓いて辿り着けるや金曜日まで
 見つからぬ物はすべて盗られたとなつて老いに責められひと日
 切りかけの茄子が転がる台所忘れん坊の夫婦が住めり
 謂れ無きクレームに時奪われる神様ばかりでないお客様
 「なるほど」と若きが軽く領けり上司も甘く見られたものよ
 どんぴしゃり台風の来て週末のアルプス登山は吹き飛ばされる
 炎天に老い連れ歩く犬の息もう虐待の域に達せり

近詠十五首

ひと言随想

喉元過ぎても

ためらわず冷房つけてという言葉響かず老いが暑さに逝けり
 容赦なく太陽は照る室温を三十五度に押し上げ続け
 突然の土砂にのまれて人生を強制終了させられし人
 湖に優雅に浮かぶ鳥なれど湖面の下に必死な水掻き

この歌が掲載されるころは、もう冬の入口。
 今年の夏は記憶に残る暑さだった。それでも
 「喉元過ぎれば熱さを忘れる」の諺通り、少し
 の涼しさがくると記憶したはずの脳も、それ
 を次第に忘れてゆく。
 この夏は暑さもさることながら、豪雨や台
 風そして地震と各地に甚大な被害をもたらし、
 記録に残る年でもある。そんな中、細やかな
 夏の楽しみも台風に奪われ、毎日職場に通つ

た。介護に関わる仕事を始めて十八年が経つ
 が、なかなかストレスも多い日々だ。
 近詠十五首は、この夏の日常を詠んだもの
 で、平凡な感性で成長のなさを改めて感じる
 日々となった。今はこの程度の私ですと、曝
 すしかないと諦めた。ただ短歌に残しておけ
 ば、後になって蘇る記憶もあろうと慰めてい
 る。喉元過ぎても忘れない、危険な暑さと連
 呼された平成最後のこの夏のことを。

村野次郎への旅 (105)

わが青春の村野次郎 (105)

千々和 久幸

1965 (昭和40) 年10月号の先生の巻頭歌は、「歌稿」八首であった。

①夏終らんとする日の午後に使ひ来て君の歌稿をうづ高く積む
②命ありて友誼みし歌集つくらんと歌稿宝のごとく扱ふ

③越えて来し有為転変の足音のきこえる深野庫之介歌集

④自らを責めて購りに似たる歌読みつつきびし胸疼き来る

⑤すてにして若くはあらねば君もわれも歌読み惜しむとどまらぬ日日

⑥先の年妻越えし雪のモンブランの絵葉書机のうしろより出づ
(妻越えし雪のモンブランの絵葉書が年経て机の中より出でつ)

⑦忙しさに追はれて長く手にせざる草刈鎌が棚に赤錆ぶ

⑧自動車にてホットドックを売り歩く商売興味をもちてわが聞く

今月の一連は当時の選者の一人であった深野庫之介選者の歌集刊行前史とも言うべき作品である。「深野庫之介歌集」は、香蘭叢書第二十八編として昭和41年に刊行されることになる。本稿を書いている現在、香蘭叢書は255編を数えるが、「香蘭」の歴史からすればこれは決して多い方ではない。

当時は今日ほど容易に歌集が出せる時代ではなかったが、先輩からは「先生がお出しにならないから会員は躊躇せざるを得ない」という話を聞いたことがある。もしそうだとすれば、それこそが創刊主宰者村野次郎の存在感であった筈である。一方で会員の方もおしなべて謙虚で、純情だった。

今日の「香蘭」は万事が「原則自由」だから、

「人事を尽くした」という記憶即ち充足感がない。人事を尽くさずにただ購るのは、人間として怠慢の跡りを免れ得まい。

⑤の歌、④の歌を自らに手繰り寄せての覚悟が窺える。「歌読み惜しむ」には、残された日々を徒や疎かに歌を詠み流すまい、とする歌人の決意と矜持を見た思いである。

⑥の歌「歌稿」一連のドラマから離れて、身辺に目移っている。作品は「妻越えし雪のモンブラン」になっているが、先生も同じ場所を踏破されている。

短歌研究文庫『村野次郎歌集』(昭50)の表紙裏には、「1973年5月7日 モンブランにて撮影」として村野先生の写真が掲載されている。

「先の年」は「ご夫人が先に行かれたこの場所に、先生は一年後に立たれたと読める。歌集では推敲されて削られているが、「香蘭」初出と読み合わせてみれば、その辺の事情がはっきりする。

⑦の歌、先生にはこんな一面もあったものか、と思った。草刈りは労働ではなく、先生には気晴らしだったのだろう。晴耕雨読は忙しい人間の嗜みではあるまい。

⑧の歌、先生のいつもながらの好奇心が微笑ましい。「自動車」が漠然としているから面白味が半減するが、当時としては話題を集めた商売だったに違いない。

今月は香蘭賞の入選発表がなされている。例月号は休録中のわたしが、なぜか応募している。応募作品三十三通、一席は江利山玉枝と竹内純子。二席は田辺芳恵、矢向春野とわたしの三人。三席に岩倉久子、山口敦子など六名。以下に森幸子、富田清風、三竹邦子などの名前が見える。

わたしの作品五首と、選後評を記す。

- ・街をいで坂をくだりて急ぎゆく義父のしかばね葬らむため
- ・妻よりも若き看護婦にわが胸を透視されおり明日見ゆるか
- ・病棟を脱けてきし夜の街あかり異郷のごとき荷車に会う
- ・ヘッドライトに次々顔を照らされてわが企みはかくも疎まし
- ・一匹の蝶が迷いてきし市電雨季をめぐもる妻も揺れいつ

「モタニズム」の作風であることに違いはない。

ら、顧みて隔世の感がある。話が逸れた。

①の歌、例によって、これから展開する一連のドラマの序歌である。深野選者は当時札幌在住だったから、三句の「使ひ来て」は歌稿を誰かに託されたものか。

先生の「おお来たか、来たか」とでも言いたげな、嬉しそうな笑顔が窺える。

②の歌、一首目の気持の昂ぶりがそのまま結句に凝縮されている。こういう師を持った門弟は幸せである。一、二句は悲惨な戦争を体験した者同士の、切実な思いであろう。

③の歌、上句は常套的な表現に留まっている、などと賢しさを言うべきではない。そんなことは先生は先刻ご承知で、言い出せば切りのない万感の思いを負担にならない軽みで、概括的に詠み留められているのだ。

④の歌、作品を改めて読み直されての感慨である。具体は言わないが、作者の手柄を熟知していればこそその「胸疼き来る」である。

この「購り」は「人事を尽くして天命を待つ」という、あの境地である。先生は苦難を極めて成った深野作品に、人間としての尊い軌跡を認められてのことである。

翻ってわたしは、これまで難局に遭遇して

い。ただ同君の以前の応募歌と比較してみると、先行しすぎると独善的になりやすく、先行をゆるめると平易になりやすいといふ問題につきあたった。そしてそれらに陥らぬためには努力して新路線を樹立しなければならぬことが考へられた。(村野次郎)

「何といつても練達者である。従来作品とは大きく方向を変えている所に注目すべきだ。今までの独善的な影が薄くなっている所から見て、今後の飛躍が期待出来よう」(深野庫之介)

「固定した技法に頼り過ぎること、不熟な用語から来る不協和音が少なからずあつて、せつかくのリリックな美しさを消しているのは、いつもながら惜しまれる。それを抜けた作品は、さりとていつてたちまち持ち前の鋭さが光つて、魅力あるのだが」(横山信吾)

それぞれに表現は違つても、ここでも言葉先行が問題視されている。休録後の応募への気負いもあったのだろう。

その後もわたしには「ボエジー短歌」という批評がついて回る。経験や事実よりも言葉が時を先導する、という思いがあつた。短歌(詩)との間合いが掴めていなかった。